

熊野三山に詣でた諸国一見の僧ワキが、都へ帰る途中、摂津国菅屋の里に着きます。



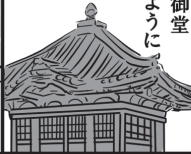
ワキ：僧

日が暮れたので里の者に宿を乞うと「土地の掟で旅人に宿を貸すことは禁じられている」と断られてしまします。



里の者は川の傍に立つ御堂を教え、そこに泊まるように勧めます。

また、夜な夜な川から怪が出るので、気をつけるようにとも言いました。



僧が御堂に泊まった夜更け、岸辺にはつきりしない姿の舟人が現れます。

面：怪士



前シテ：舟人

どうやら亡魂である様子の舟人に僧が何者かと尋ねると、彼は源頼政である退治された鶴であると答えます。



舟人は、その退治された時の様子を語り、僧に後を引つてほしいと頼みます。



近衛天皇の頃、主上が夜毎お苦しみになり、高僧の祈禱も全く甲斐のない時がありました。

丑三つ時に東三条の森からきた黒雲が御殿を覆うと、必ず主上はお苦しみになります。



僉議の結果、源頼政に警固の命が下りました。



頼政と郎党・猪の早太が退治したその怪は、頭は猿、手足は虎、尾は蛇、鳴き声は鶴に似た怪物でした。

語り終えた舟人が波に紛れて消え失せた後、僧が読経をしていると、鶴の亡霊が現れます。

面：猿飛出



後シテ：鶴の亡霊

鶴は、頼政に射られて死んだ様子や、そのことの名を上げた頼政と、汚名を流し、死骸を空舟に入れ淀川に流された我が身を語ります。

そして、冥土の闇路に墮れた自分を仏の光で照らしてほしいと願って、月と共に海中へ消え失せるのでした。